



教育コラム

現地校と受験準備の両立

いわゆる「帰国子女受験」の指導をしていることもあり、受験や学習についてさまざまな相談を受けます。その中で今回は、高校生の「現地校と受験勉強の両立」についてお話します。

ハイスクールになると現地校の課題も増大しますが、同時にTOEFLやSAT、小論文などに向けての準備もしていかなければなりません。そのあたりのバランスについてのお話です。

FAQ:むだを省くにはどうしたらいい?

「APやHonorsを選択して成績が下がるより、楽なクラスでAをとった方が有利?」

「SATは一部の大学でしか必要ないからTOEFLに専念した方が得?」

「受験科目を絞り込むために、早めに進路を決めないといけない?」

生徒からも保護者からもよく出るこれらの質問、その背後には、できるだけ「むだ」を省いて「効率的」に受験準備を進めたいという発想がうかがえます。「やらなくていいこと」はできるだけやらずに済ませ、入試に向けて「目的的に」勉強をしていきたい。「教育関係者」からそういうアドバイスを受けた、という話さえ耳にします。

しかし、長年、帰国子女受験に関わってきた経験を踏まえ、実はそういった一見「むだ」に見えることにも誠実に取り組んだ人こそ栄冠に近い、ということをお伝えしたいと思います。

現地校の科目選択

確かにAPやHonorsのクラスを選択すると、負荷も高く、成績も低めに出る可能性があります。しかし、少なくともいわゆる一流大学はGPA(評定平均)だけを見ているわけではありませんし、何より難度の高いクラスで奮闘したことによる学力の伸長や経験値の高まりが、実際の入試においても大きな力となります。むしろ結果はそのことを如実に示しています。

SATとTOEFL

TOEFLはほとんどの大学が出願時に要求し、スコアも数点刻みで合格可能性を上げてくれます。一方SATは、難度がきわめて高いのに、スコアを必要とする大学は少なく、しかもかなり「まとまった点数」に達しないと結局、帰国子女受験では使えない、というある意味、理不尽なテストです。

そこで「SATは捨ててTOEFLに専念」というようなアドバイスをする人が出てくるらしいのですが、これも経験上、感心しません。というのは、SATに向けての学習には、「TOEFLの成績を大きく伸ばしてくれる」、「社会に出て知的レベルの英語が求められた時の基礎になる」という二つの圧倒的な利点があるからです。これもまた多くの事例に裏付けられています。

進路決定の時期

「受験科目を絞るために早めに進路を決定する」というのもあまり推奨できないアドバイスです。帰国子女受験は、文系は英語・小論文、理系は英語・小論文・数学・理科です。学部による大きなブレはありません。例えば文系なら、文学部も法学部も経済学部も商学部も社会学部もほぼ同じです。

確かに文理での差は大きいですね。しかし、たとえ最終的に文系に進路を絞り込んだとしても、数学をやっているれば経済学部・経営学部などで受けられる大学がグンと広がります。だから、話をこと受験にかぎったとしても、数学がムダになる可能性は低いのです。



まとめ

こうやって考えてくると、結局は愚直に努力することが受験でも成果を上げる最良の手段だ、ということになってきます。両立はしんどいですが、それを乗り越えた帰国子女が、これからの日本の社会のなかで果たせる役割は非常に大きいと思っています。高校生のみなさんが、そんな気概をもって米国での生活を存分に楽しんでくれること、期待しています。

(駿台ヒューズン校 大高 仁志)

私の本棚



「ツバキ文具店」
小川 糸 著

『ツバキ文具店』は代書屋という別の顔を持つ。店主である鳩子のもとに色々な事情の依頼主が訪れる。その度に鳩子は、書くためのペンや紙類を選び代書屋の仕事をする。先代からの教えを守り、小さな文具店に訪れる依頼主とご近所さん達との関わりを描くこの本。舞台となっている鎌倉の四季と共に鳩子の生活が描かれています。

鳩子さんは、依頼者の思いをペンや紙、切手にいたるまで考え手紙を書きます。それぞれに意味があり、思いがある。私は代書屋という仕事であっても、その心遣いに素直に素敵だと思いました。そして、今回文具店が舞台となっていて数多くの文房具が登場するのが、文房具大好き人間の私としてはたまらなかつたです。ペンと紙。手紙を書く上

で欠かせない物。アンティークの紙が出てきたり、文房具好きの聖地「伊東屋」の文具が出てきたり。その描写もまた、たまらなく好きでした。

最近手紙を書いたのはいつだろう。アメリカに来てから、メッセージカードを書くようになったが、それ以外に書いたのは思い出せない。ほとんど、パソコンや携帯でことを済ませてしまう事が多く字を書く事がめっきり減った。決して上手では無い自分の字に自信がないし、文字にする事が少し照れ臭い感じもする。でも、手紙はもらうと嬉しいものです。相手のことを思ってしたためる手紙には、書き手の思いが乗っかって、デジタルのメールとは感じ方が全く違うと思います。文中に「生身の人間の書く文字には単なる美しさではない味が加わる」という言葉がありました。手紙にはそれが最もよく現れる。「書き文字は、その人と共に年を重ね老いてゆく」まさにその通りで、今の自分の書く文字も決して10代の頃と一緒では無いし、より味が増した年相応な文字になっているのだと思います。文字を書く事が少なくなった今、たまには遠く離れた家族や友達を思いながら手紙でも書いてみようと思います。



小川糸さんのこの作品。「キラキラ共和国」という続編も出ています。小川さんの作品は出てくる食べ物にも注目です。小川さんの書く食べ物は本当にお腹がすきます(笑)クゥー!!美味しそう!となる食べ物が沢山出てきます。他の作品でも是非、小川さんの世界を味わってみてください。

(編集委員 三野 牧子)

出典: [幻冬舎](#)